

忘れ物終着駅にて

○登場人物

世永 (32)

後藤 (55)

○終着駅のような場所・ホーム(昼)

巨大なターミナル駅。

何番線まであるのかわからないほどの無数の線路。

終着地点には、数多のガラクタが積み上がっている。

ぬいぐるみや、腕時計、カバンや傘、など。

そのホームをゆっくり歩いていく世永(32)。

その後ろをキョロキョロしながら歩く後藤(55)。

一人とも駅員のような格好。

後藤「本当にこれ、全部？」

世永「はい。忘れ物です」

後藤「こんなにたくさん……」

世永「ええ、世界中から届きますから」

後藤「すごいな。…あ、これ(と、ぬいぐるみを拾う)」

世永「それは最近届いたばかりです。持ち主は子供ですね」

後藤「へえ？」

世永「買ってもらったばかりのぬいぐるみで、まだ愛着もなかった。だから取りに来なかったんです」

後藤「なるほど、そういう情報もわかるんですか？」

世永「いえ、これは職員あるあるで、だんだんわかってしまうんですよ。物の記憶みたいなのが、見える、っていうか。説明が難しいですね(と笑って)」

後藤「へえ、すごい…なんかやり方とか、コツとか、教わるんですか？」

世永「いえ、慣れ、ですね」

後藤「慣れ…」

世永「大丈夫、1、2年働けばすぐですよ」

後藤「列車は朝、到着するんですか？」

世永「はい。朝来て、午前中に職員が一齐に荷下ろしします。これが一番ハードかも。それから、午後にチェックです。何がどれくらいあるか、とか」

後藤「チェックが終わったら、この荷物はどこへ？」

世永「どこにも行きません。ただここに、残ります」

後藤「(近くにあった帽子を見て)あ、自分も前、こういう帽子を失くしました。あれもここにあるのかなあ」

世永「どこかにあると思います。完全に忘れていないようですよ」

後藤「完全に忘れる？」

世永「持ち主の記憶から完全に失われた物は、ここに置いておけません」

後藤「え、じゃあ」

世永「別の場所へ」

後藤「完全に記憶からなくなるって、つまり死んだ時、ということでしょうか」

世永「大抵はそうですね。人は意外と忘れないものです」

後藤「もし自分の忘れ物を見つけたら？」

世永「手続きすれば受け取れますよ」

後藤「いいですね。みなさん取りに来るでしょう」

世永「いえ、来ません。少なくとも、僕が働き始めてからは一人として」

後藤「それはなぜでしょうか」

世永「世界には物が溢れていますからね。代わりならいくらでもあるでしょう」

後藤「あなたも何かを忘れたことが？」

世永「ありますよ。子供の頃、とても大事にしていたもの。でも、何を忘れたのか思い出せない。僕はずっとここで探しているんです」

後藤「ここではどれくらい働かれてるんですか？」

世永「さあ、忘れました」

後藤「僕も立派な駅員になりたいです」

世永「今日からよろしくお願いしますね」

後藤「はい」

世永「あなたは、何を忘れたのですか？」

後藤「僕も思い出せないんですよ」

世永「おっと。そろそろ列車が来る時間です」

(おわり)